

【臨床・研究】

島根県立中央病院総合周産期母子医療センター における超早産児の治療成績と課題

い	とう	さと	こ	か	とう	ふみ	ひで	しば	た	なお	あき
伊	藤	智	子 ^{1,4)}	加	藤	文	英 ^{1,2)}	柴	田	直	昭 ^{2,5)}
ま	たま	ち	ひろ	あ	べ	やす	ひろ	ひら	で	とも	ひろ
真	玉	千	紘 ²⁾	阿	部	恭	大 ²⁾	平	出	智	裕 ²⁾
ひ	ぐち		つよし	こ	いけ	だい	すけ	みなみ		のり	あき
樋	口		強 ^{2,6)}	小	池	大	輔 ²⁾	南		憲	明 ^{1,7)}
ほり	え	あき	よし ^{1,8)}	もり	やま	まさ	し ³⁾	くり	おか	ひろ	こ
堀	江	昭	好	森	山	政	司 ³⁾	栗	岡	裕	子 ³⁾

キーワード：超早産児，母体搬送，生存退院率

要 旨

2014年4月から2019年3月までの5年間に、島根県立中央病院総合周産期母子医療センター新生児集中治療病棟に入院した超早産児：54人の治療成績を検討した。超早産児の生存退院率は90.7%であった。新生児死亡は5人(9.3%)で、いずれの症例も出生後の新生児治療には限界があった。母体搬送は40人(74.0%)で、うち37.5%(15人)は搬送後24時間以内に娩出に至った。また、母体搬送できず新生児搬送症例：1人、搬送途中で救急車で娩出に至った：1人がいた。

在胎22-23週で娩出せざるをえなかった超早産児の救命率は88.9%と著しく改善した。過去5年間の島根県立中央病院総合周産期母子医療センターでは、在胎23週以上、出生体重：500g以上、で生存退院率が死亡退院率を上回っていた。

今後、後遺症なき生存(intact survive)を念頭においた超早産児の長期予後の検討が必要である。

はじめに

Satoko ITO et al.

- 1) 島根県立中央病院新生児科
 - 2) 島根県立中央病院小児科
 - 3) 島根県立中央病院産婦人科
 - 4) 現 愛媛県立中央病院新生児内科
 - 5) 現 島根大学医学部附属病院小児科
 - 6) 現 雲南市立病院小児科
 - 7) 現 みもりキッズファミリークリニック
 - 8) 現 松江赤十字病院小児科
- 連絡先：〒790-0024 愛媛県松山市春日町83番地
愛媛県立中央病院新生児内科

島根県立中央病院は、1981年から新生児の迎え搬送に出る周産期センターとして新生児診療を開始した。2005年に島根県の総合周産期母子医療センターに指定され、母体・胎児集中治療室：認可3床、新生児集中治療病棟：認可6床、新生児回復期治療病棟18床で運用している。